



## バフチンの対話 / 対話としての詩学 : オープンダイアローグ (Open Dialogue) の背景にあるもの

著者	五十嵐 沙千子
著者別名	IGARASHI Sachiko
雑誌名	哲学・思想論集
巻	44
ページ	126(33)-109(50)
発行年	2019-03-28
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00155161">http://doi.org/10.15068/00155161</a>

## バフチンの対話 / 対話としての詩学

——オープンダイアログ (Open Dialogue) の背景にあるもの——

五十嵐 沙千子

人と人が向き合って話す、というのはどこにでも見られるごくありふれた日常的な風景である。それは誰もがやっている行為でさえある。だがこうした日常的行為が「対話」と呼ばれるとき、この「対話」はほとんど魔術的な力を持つ。

例えば国際政治の文脈で様々なコンフリクトを解決する手法が、かつてのパワーゲームから「対話」へと転換してきたことは既に周知のことだろう。だが、企業の利益を大幅に増大させマネジメント・パラダイムを刷新するための最重要課題が「対話」なのだとしたらどうだろうか？ あるいは、学校が生徒・学生の主体化を促し、ハイパーメリトクラシー期のコンピテンシーを保証すると同時に生徒・学生の知識習得率を上げる不可欠なツールがやはり「対話」なのだとしたら<sup>1</sup>？

ここまではまだよい。企業が「人でできている」限り、人々の関係性の質を上げるツールとしての「対話」は重要であろうし、また（なぜ対話が「知識習得率」を上げるのかは一旦置くとしても）企業やグローバル化する政治が求める「関係力」としての「対話力」を新たなコンピテンシーとして学校 / 文科省が生徒・学生に保証しなければならないことも容易に想定できる。

しかし、もし医療現場において「対話」が「投薬治療の代わりになる」としたら？ あるいはそれどころか「ただ話すだけの対話」が、重度の疾患に対して従来の治療を凌駕する目覚ましい治療成果をあげ、医療のパラダイム自体を劇的に変える可能性をもつとしたらどうだろうか？

「対話」は国際政治や企業のマネジメント・パラダイムを変え、教室の風景も変えてきた。そして、今や人を治癒に導くもの、しかもこれまで投薬に依存するしか治療の道がないとされてきた重度の精神疾患を治癒に導く「魔法」として注目されているのである。

精神医療におけるこの「対話」の手法が「オープンダイアログ (Open Dialogue 以下 OD)」と呼ばれる技法である<sup>2</sup>。

本論文はこの OD の「対話」、というよりむしろ OD において現象する「対話」の姿を追う。

とはいえ OD はあくまで医療の技法である。OD の「対話」を思想的に掘り下げていくには、「OD の思想的支柱」とされるミハイル・バフチンの「対話」を明らかにしていくしかあるまい<sup>3</sup>。

それにしても、いったい「対話」は何を起こしているのだろうか。

## 1 オープンダイアログ (Open Dialogue) の「対話」

OD を日本に紹介した斎藤環によれば、OD とは最重度の統合失調症を含む深刻な精神疾患に対するきわめてシンプルな治療・ケア技法である。クライアントと医師たち専門職のチームが毎日「対話」をする。といってもこの「対話」は決まった筋書きも医療上の質問もない「世間話のようにただ話すだけ」のものである。しかし、「これが「ミーティング」といわれるものですが、基本的にこれだけ<sup>4</sup>」で、「このシンプルきわまりない技法が、抜群の治療成績を上げている<sup>5</sup>」のである。

例えば、OD を牽引してきたヤーク・セイックラによれば OD は次のように行われる。

まずはクライアント（患者）ないしその周囲からの救援依頼がある。24 時間以内に治療チームが患者の自宅に向かい<sup>6</sup>、そこで上述の「世間話のような」対話をはじめ。それは通常の「医師-患者-関係においてなされる問診」ではない。それはあくまで、患者、患者の家族・友人・職場の関係者など患者を取り巻くコミュニケーションのネットワークを作ってきた人たち（「ネットワークメンバー」<sup>7</sup>）、医師を含む治療側のスタッフ（「治療チーム」）の「全員による対話」であるとされる。患者、医学的に素人であったとしても患者のことをよく知っているネットワークメンバー、患者のことについては知らないが医学的専門知を持つ治療メンバーが協力して「一つのチーム」を作り、全員がそのチームを支える対等なメンバーとして、メンバーであるその責任のもとに対話を続け、どんなことに対しても、治療方針や治療の進め方に関してさえも「その場で、そのつど、全員で」相談し、決定するのである。したがって当然、「治療に関して、（治療）スタッフ限定のミーティングはありえません<sup>8</sup>」とセイックラは言う。「医師による診断」や「医師による治療」が「上から与えられる」のではない。「決まるまで全員で話す」のである。「権威のある外部の誰かに頼る」のではない。「全員でその対話の場を支えていく」のである。どうなるか先行きも見えず外部の権威にも依存できない、ただ全員で対話を続けていく「だけ」の不確実な状況をそれでもやはり全員で耐えながら<sup>9</sup>、ケースによって異なる事情に合わせて<sup>10</sup>、「ネットワークメンバー」と「治療チーム」の全員が治療まで責任を持ち<sup>11</sup>、対話を続けていくのである<sup>12</sup>。だからこそ OD の場は必然的に「車座」になる<sup>13</sup>。そこにいる全員が一人の人間 = 主体として、専門用語や上下の権力関係も一切排除して「自らの立場性を捨てた、いわば丸腰の言葉<sup>14</sup>」で「車座」のフラットな対話を支えていくのである。

OD の要請はこれだけ、つまり「全員が対話し、病が癒えるまで全員で OD の場を支えていく」ということだけ、全員でオープンダイアログ = 開かれた対話を支えていくということだけである。

確かにこれは通常の医療現場の風景とはかなり異なるものだろう。だが、OD は私たちの日常にある対話とはいったいどこが違うのか？ そもそもこの対話はなぜ「オープンダイアログ」、すなわち開かれた対話 / 対話を開く / 対話を開くと呼ばれるのだろうか？

セイックラは言う。OD においてまずなによりもなすべきことは「患者であれ誰であれ発言に対して「応答」を返していくこと<sup>15</sup>」である、と。どんな「おかしな」話、どんな「外れた」テーマ、誰の「場違いな」発話であっても、「あらゆる陳述や発言は応答されなければなりません。発言と応答を結び合わせる対話の美学というものがある、それが対話を、聞き手がいない“モノログ”とは異なる“ダイアログ”へと導いてくれるので

す<sup>16</sup>」(傍点引用者)。

通常の対話には話の筋がある。また対話の参加者にはそれぞれ社会的背景があり、対話の場にも TPO がある。対話の作法についての暗黙の合意もある。そうした様々な文脈に則り、見えない規則に従って対話を進めていくのが私たちの通常の対話である。だが OD では「筋違い」な「どんなおかしな話」も受け入れられなければならない、「患者であれ誰であれ」区別のないフラットな発話がなされなければならない、社会的背景・立場・TPO を無視した発話も受け入れられなければならない。通常の対話の規則が、対話の文脈(話の筋としても、また社会的文脈としても)に従うことを命じるものであり、規則を破る「正しくない」発話を場から排除することを命じるものだとすると、これに対してどんな発話も応答されなければならないとする OD の規則は、発話に対して規制的・排他的に働く通常の対話の規則を廃棄するという規則である。文脈を守るのではない、「発話-応答」のセットを守ることが重要なのである。文脈ではなく、「発話-応答」を「対話」と OD は呼ぶのである。だからこそどんな発話も OD では「受け入れられる」以上の権利を与えられる。どんな発話も「対話」を構成するものなのである。これまで通常の対話のなかで排除されてきた「おかしな発話」は OD においては「一つの発話」として、つまり正当な「この声」として受け入れられ、正当に応答を返される。それら無数の声に場を開き、それを聴き、応答を返すことこそが、その場を対話の空間にするための OD の絶対的規則なのだ。

だとすれば OD が「開く」のは「通常の対話」に他ならない。それは、通常の対話が要求する「一つの文脈」ではなく「多数の文脈」が不確定に入り交じり生起する場を、「ひとつの」意味の流れではなく「多くの」声が騒めく多声的 = ポリフォニックな場を、空間に新しく切り開いていくということである<sup>17</sup>。そしてそれが OD において「なされること」=「OD という治療」なのだとすれば、OD は患者を治療するのではない、患者が棲んでいた「対話」を治療するのである。そして、この「対話」への介入、つまりそれまで患者が棲んでいた「ネットワーク」への介入が「対話」を開き、「対話が開く」その過程で患者が癒えていくのだとすれば、患者は「対話」の中で病み、「対話」の中で治癒するのだと言わなければならない。

このシンプルなあり方、つまりあらゆる声に「対話」を開き、先行きの見えない不確実性を耐えてひたすら対話を続けていくという「多声性(ポリフォニー)」・「不確実性への耐性」・「対話主義」が OD の柱である。セイックラはこの三本の柱を「オープンダイアログの詩学」と呼ぶ<sup>18</sup>。そして OD を支えるこの「詩学」こそ、バフチンの「詩学」に導かれたものなのである。

## 2 バフチンの前提

バフチンは「あらゆる言葉と形式には、志向が住みついている」(小説 67) と言う。

「言語の中にはいかなる中性の、〈誰のものでもない〉言葉も形式も残されない。言語は諸々の志向に全面的に自己を奪われ、貫かれ、隅々までアクセントを付与されている。……すべての言葉に職業、ジャンル、潮流、党派、一定の作品、一定の人間、世代、年

年齢、一定の日付、時刻が感じられる。どの言葉にも、そこで言葉が、自己の社会的に緊張した生活を営んでいる一つの、あるいは複数のコンテクストを感受することができる<sup>19)</sup> (小説 67)。「誰のものでもない」ニュートラルな言葉というものはない。言葉はすべて一定の社会的文脈をもつ他者たちの生の痕跡であり、彼らが世界と対象を把握するその地図である。そしてあらゆる対象はその他者の言葉によって彫り出されたものである。だとすればわれわれが生き、世界を認識するというのは、このような他者の言葉の世界に入ること、そして他者の言葉の通りに世界を、そしてあらゆる対象を受け取るということに他ならない。「あらゆる具体的な言葉(言表)は、それが向けられている対象を、常に、あらかじめ条件づけられ、論難され、評価されたものとして、またその対象をおおい隠すような霧につつまれた、あるいは逆に、それについて語られた他者の言葉の光に照らされたものとして見出すからである。その対象は、一般的な思考や視点、他者の評価やアクセントに束縛され、貫かれている」(小説 39-40、傍点引用者)。対象を言葉で、しかも「他者の言葉」で認識する者である限り人間はこの「他者の言葉」に全面的に規定されるしかない。まっさらな「私の言葉」などというものはなく混じりけのない「私の目」で世界を見ることのできる者も存在しない<sup>20)</sup>。われわれは他者の言葉を自分の声で語る植民地的主体 = 他者としてこの世界に生き、対象を受け取っているのである<sup>21)</sup>。

こうした社会構成主義的な他者の先行性に加えて、バフチンはもうひとつの他者の優位性を語る。

「言葉が他者の言葉と出会うのは、対象においてだけではない。あらゆる言葉は応答に向けられており、予期される応答の言葉の深い影響を免れることはできない。生きた会話の言葉は未来の言葉 = 応答に直接明からさまに向けられる。すなわち、それは応答を挑発し、それを予期し、それに向かって構成される」(小説 45、傍点引用者)のである。

この場合、他者とは言うまでもなく、「生きた会話」、すなわちリアルなその都度の会話における「私の聞き手」である。私の発話は、これから返されるであろう他者の応答 = 「未来の言葉」をあらかじめ予期して組み立てられている。「ここでは、出会いの舞台として機能するのは対象ではなく、聞き手の主観的な視野である。このため、この対話性は、より主観的・心理的で、しばしば、偶然的な性格をになう。それは、時には露骨に迎合的であり、またある時には、挑発的・論争的である」(小説 49)。この聞き手にわかるように、聞き手に受け入れられるように、あるいは聞き手を動かすように私は言葉を選ぶのである。「礼儀にかなっているだろうか?」「タイミングは悪くないだろうか?」「こう言えばこの相手は動くのではないか」といった具合に、そのつどのリアルな発話の場で、私はまだ発せられていない未来の他者の言葉に出会い、それを聞き、あらかじめ他者に従っている。聞き手に対して声を発するとき、私はその聞き手の「視野の中に入りこみ、自己の言表を他者の領域で、その聞き手の統覚的な背景の上に構成する」(小説 49)のである。対象の認識において私はその対象を分節化してきた既存の他者たちの痕跡に出会い、規定されていたのだが、今度は、私は私の発話において、眼前する他者 = 聞き手の未来の応答に規定されているのだ。

こうして私の声は二重に他者に先行され、二重に「対話的」である。

まず、私が対象を見るとき、私は先行する既存の他者たちの眼を通して対象を眼差し、他者たちの言葉を受け取って対象を認識する。対象において私は既存の他者と出会い / 規

定されている。

だが同時に、聞き手の前に立ち、その聞き手に向かって語りかけるとき、私はまだ存在しない未来の他者の反応に向けられている。発話において私は未来の他者と出会い / 規定されるのである。

こうした私の二重の内的対話の中で私の声は生起する。私が他者たちの世界に生きているかぎり、私の声は私の中で、常に既に到来している現在の / 常に未だ到来しない未来の他者の言葉にいつも占領されているのである<sup>22</sup>。

これが私の通常のあり方である。

こうしたあり方をバフチンは「散文 (小説)」に擬える。散文 (小説) とは言うまでもなく「作者が書いたもの」である。「小説の登場人物がそこで生き、死んでゆく外部世界は、人物全員の意識に対して客観的な関係にある**作者の世界**である。そこではあらゆるものが、すべてを取り込んでしまう全知の作者の視野の中で見られ、描かれる。……そこにはただ一つの認識する主体が存在するだけで、残りはすべて彼の認識の**客体**に過ぎない」(詩学 145-146)。小説は作者の語り = モノログであり、登場人物はすべて、ただ一つの「主体」である作者に作られた「客体」である。登場人物たちは当然のことながら、作者によって筋の中に配置され、その人物・そのキャラクターとして設定され与えられた受動的な生を生きる。こうした「モノログ的な構想においては主人公は閉じられており、はっきりとした意味上の輪郭で囲まれている。彼の行為も経験も思考も意識も、すべて彼はこれこれの者であるという定義の枠内で、つまり現実の人間として決定された自己イメージの枠内で行われるのである。彼は自分自身であることをやめることができない。つまり自分の性格やタイプや気質の境界を逸脱すれば、必ずや彼に関する作者のモノログ的な構想を破壊してしまうのである」(詩学 107、傍点引用者)。

現実の私も「すでに」私自身に先立つ他者たちの世界の中に投げ込まれ、その他者たちの世界を絶対的なものとして受け取り、それに従い、さらにそのつどの私自身の発話において、そのつどの他者として現前する聞き手の「まだ」語られてはいないが、要求されており、既に予期できる未来の言葉との内的対話を通して再定位され続けている。私は他者の文脈を逸脱することはできない。私は他者たちの世界の中で与えられた「自己自身」を逸脱することはできない。私に可能なのは、与えられ、要求された生に同一化すること、すなわち常に私を超越した他者によって与えられ、同時に閉ざされた生を「私の生」として生きることにはかならない<sup>23</sup>。

もちろんそれは本当の私ではない。私の本当の声は「まだ」探されてさえない。探されることもないだろう。私は、「すでに」と「まだ」の形式において、私の二重の内的対話 = モノログの中でいつでも占領されているのだ。私の「本当の声」は永遠に「まだ」語られず聞かれないものに留まるのであり、私は、「すでに」と「まだ」の間であらかじめ失われた私の不在の生を生き延びているのである。ここに私が私である余地はない。

こうして私は死に際にこうつぶやく。

私は一生嘘をついてきた。本当のことを言っているときにもだ。私は一度も真実のために語ったことがない。いつも自分のために語ってきたのだ。そのことは以前から気

がついていたが、いまこそはっきりわかる…… [『悪霊』 第三部第七章二節]

ドストエフスキーは『悪霊』の登場人物であるステパン・トロフィーモヴィチ・ヴェルホヴェンスキーにこう言わせている<sup>24</sup>。ステパン・トロフィーモヴィチはまさに他者の文脈を生き、他者の言葉で、先取りされた他者の応答に合わせて「適切に」生きてきた人物である。彼は「真実のため」に語ったことがない。彼にとって重要なことは「真実」ではなく「自分のために」語ることである。他者たちの世界の中で自分が生き延びていくことのために彼は他者の言葉＝「適切な」言葉＝「嘘」を語り、自分の本当の言葉を捨ててきたのだ。すべての私と同様、彼は自分の言葉ではなく他者の文脈を、自分の生ではなく他者＝作者が設定したステパン・トロフィーモヴィチを生きてきたのである。

彼は他者の言葉、作者のモノローグを生きてしまった主体である。私は与えられた世界を受け入れ、与えられた私を受け入れ、それはもう自分などには「どうすることもできないもの」と思いこんで、自分自身の不在の生を自らに与えてきてしまった私なのである。

ドストエフスキー＝バフチンは、まさにこうした不在の生、他者のモノローグに占有された生を拒否する<sup>25</sup>。

こうして要請されるのが小説の否定としての「詩」なのである。

### 3 詩学

散文的生を生きる者が他者（作者）の言葉に従い、他者の眼で対象を見、他者の応答を先取りして、いわば他者のモノローグの文脈を生きるとすれば、ドストエフスキー＝バフチンにおいて、詩を生きる者は他者の文脈を拒否することにおいて生きる者である。詩を生きる者は、あらかじめ他者に奪われている自らの生の取り戻しを生きようとする者だからである。したがって詩を生きる者の言葉は必然的に「約束ごととして他者の言葉とのあらゆる相互作用から切り離されており、他者の言葉を全く考慮に入れることがない」（小説 53）。「従うこと」「適合すること」ではなく、他者の言葉を「切り離すこと」「違反すること」こそ詩の規則である。「詩人は、自己の言語を完全に独占的に支配し、自己の言語のすべての要素に対して等しく責任を負い、それらすべてを、自己の、しかも自己のみの志向に従わせなければならない。……このために詩人は、言葉を他者の諸志向から引き離し、そのような〔他者の志向から引き離された〕言葉と形式のみを用いる。しかもそれらを、それらの言葉や形式が言語の個々の志向の諸層および個々のコンテクストとの結びつきを失うようにのみ用いる」（小説 72-73、傍点引用者）のだ。

例えばある詩は「蟬の声が岩に沁み入る」と言う。蟬の声が岩に沁み入るという事態は現実にはない。そんな「ありえない」発話は散文の日常では当然、拒絶されるだろう<sup>26</sup>。だが、理性が「ありえない」＝「ナンセンス」だと否定し排除するこの表現こそ「詩」の言葉であり、他者たちが用いない用語法 / 他者たちの用語法を越えて行く用語法こそ詩人の発話である。他者の言葉の「中」に安全に埋没＝同一化しようとする自分自身の欲望に逆行し、すべての私の発話を他者の「正しい」語法に回収しようとする私自身の理性の力に逆らって、まさにその他者の言葉の「外」に越え出て行くことにこそ詩の命、他者で

はないこの私のそのつどの唯一の生があるのである。そしてそのつどの私の生を生きるという形式以外に私が私の唯一の生を生きる可能性がないとすれば、必然的に私は他者の言葉ではない私の言葉、借り物の他者の言葉ではない言葉 = 詩の領域を生きなければならない。私は一般化され他者化された散文的生を転覆する生を生きなければならない。「ナンセンス」を特徴とする詩の言葉は、無意味 (ナンセンス) なのではなく、他者たちの正当性 = 理性に対立するもの、反理性 (ナンセンス) なのだ。

だがすべての私が詩人であることはできない。私には詩人のように言葉を自在に操る力がない。自在に操る勇気もない。「間違った言葉」「おかしな言い回し」は絶えず修正される。他者に受け入れられなければ私の声は聞いてもらえない。その怖れの中で私は他者の言葉を「正しく」使うこと、他者に合わせることに汲々としてきたのである。私の「本当の声」はもう萎縮している。

たしかに詩人は散文 = モノローグの専制を脱出することができるだろう。しかし、詩人だけが散文 = モノローグの専制を脱出する特権を持つことをドストエフスキーは拒否する。どんな人も「詩」を / 本当の自分を生きる権利を奪われてはならないからである。こうしてドストエフスキーの戦略は明確である。

ドストエフスキーは、すべての私が生きる場所の全体をそっくりそのまま「詩」にするのだ。

それはあらゆる声に対話の場に持ち込むということである。「ひとつの」「正しい」声ではない。「間違った」「おかしな」声、あるいは「間違った声」として抑圧されてきた声、そこにいない声、そこで沈黙する声のすべてをそこに立ち上がらせるということである。それはありとあらゆる声を持ち込むことによって、「正しい」「適切な」声だけしか許さないこの他者の世界 = モノローグの専制を転覆するということである。それは、モノローグの散文的世界を反・モノローグとしての「詩」の場に、「正しい声」しか許されない場を「間違った」声、不適切で・節度のない・狂った・遅れた・おかしな・排除され殺されてきたあらゆる声がかぶつかり合う場に、つまりダイアログの場にすることである。この声のカオスをこそバフチンはダイアログと呼ぶのだ。それは、どのような場も自分の本当の声を出す権利を持つあらゆる主体の場にすること、一切の規則を脱した主体同士のダイアログでモノローグの閉鎖を破壊することである。それは「一生、嘘をついてきた」ステパン・トロフィーモヴィチに「本当のこと」を語らせること、他者として生きてきた彼を彼自身に連れ戻すこと、まさに私の中にいる沈黙する私、「人間の内なる人間」(詩学 63) を解放しようとするに他ならない。

こうしてドストエフスキーは沈黙する私に呼びかける。私はいつでも他者の「正しい」言葉で語ろうとするのだ。その私の「嘘」をどこまでも拒否し、私の「内なる人間」の萎縮した声を求めてドストエフスキーは呼びかけるのである。萎縮し沈黙する私の「内なる人間」をさらけ出させ、その「本当の声」を引き摺り出し、声のカオスをその場に生起させるように、その声に向かって呼びかけるのである。そこにしか私の「内なる人間」を解放する方法はない。もはや「内的人間を冷静沈着な中立的分析の客体として、彼を完全掌握し、観察し、理解することはできないし、彼と融合し、彼に感情移入することによってもまた、彼を完全掌握することはできない」(詩学 527) ことは自明である。「内的人間に接近し、その正体を暴き出すには——より正確には、彼に自らをさらけ出させるためには



——彼と対話的な接触交流を持つ以外に手立てはない」(詩学 527、傍点引用者)。ただこの呼びかけにおいてのみ、つまりその「接触交流においてのみ、人間と人間の相互作用においてのみ、《人間の内なる人間》は他者に対しても、その人自身に対しても、その正体をさらけ出す」(詩学 528) のだ。ダイアローグは、散文的世界から人間が引き摺り出され、自己の声を取り戻し、真に自己を生き始める場なのである。

だからこそ「ドストエフスキーの芸術世界の中心に対話が、しかも手段としてのではなく、自己目的としての対話が位置しなければならないのは、自明の理である。そこでは対話は、事件の入口ではなく、事件そのものなのだ。対話は、いわば人間の既成の性格というものを暴き出し、現前させるための手段ではない。そうではなくて、人間はそこで自分自身を外部に向かって呈示するばかりか、そこで初めて、繰り返し言うておけば、他者に対してだけではなく自分自身に対しても、彼がそうであるところの存在となるのである。存在するということ——それは対話的に接触交流するということなのだ。対話が終わるとき、すべてが終わるのである。だからこそ、対話は本質的に終わりようがないし、終わってはならないのである」(詩学 528、傍点およびルビは引用者)。

これがバフチンの言うドストエフスキーの詩学の本質である。まとめよう。

すべての私は私に先行する他者の言葉の世界に投げ込まれており、「先行する他者」に書かれたシナリオに適合して生きている。通常の対話での私のそのつどの発話は私にとっていつも私の適合を試される緊張に満ちた踏み絵であり、この発話の中で私は私自身を「正しい」方へ、「適切な」方へと絶えず再定位 = 自己疎外し続けている。こうしてまさに通常の対話のなかで私はあらかじめ書かれたシナリオを生きる「他者」に同一化していくのだが、このような「回収する散文的世界」に対し、ドストエフスキー = バフチンは散文の専制を転覆させる「解放する詩的空間」を立ち上げる。それは、散文の成立要件である「ひとつの筋」「正しい台詞」を攪乱する「暴力」としての、筋のない・間違った・バラバラな・無数のまともでない声が同時に生起するカオスの空間である。ドストエフスキーにとって、これまで専制的モノログの中で抑圧されてきた声をすべて解放し乱立させるこの空間こそが詩の「空間」= ダイアローグに他ならない。疎外されてきた私はこのダイアローグの空間の中で初めて「本当の声」を取り戻し、「本当の私」を取り戻していく。このダイアローグを閉ざすことはモノログの圧政を放置すること、私が私を取り戻す可能性を閉ざすことである。だからこそドストエフスキーにとっては「対話が終わるとき、すべてが終わるのである。だからこそ、対話は本質的に終わりようがないし、終わってはならない」のである。

一  
二  
九

しかしこの呼びかけの対象である「内なる私」はもう萎縮している。私自身が私の生き延びのために私の「内なる人間」を絶えず黙らせてきたからである。場を与えられたからといってその私の「本当の声」が簡単に立ち上がるはずはない。モノログの専制は既に私に内面化されてしまっている。ダイアローグに抵抗するもの、私を占領する他者の言葉から「詩の言葉」= 「本当の言葉、本当の声」の取り戻しに抵抗するのは私自身なのだ。私が私を見張り、私を解放することを拒むのである。こうして「内なる人間」の本当の声を引き摺り出そうとするドストエフスキーの「呼びかけ」は、かなり苛烈なものとなる。

#### 4. ダイアログの技法

バフチンは言う。「ドストエフスキーが自分の主人公たちから、そのぎりぎりの限界にまで達するような自意識の言葉を搾り取ろうとして、彼らに対して行なう一種の精神的な拷問は、人物描写に含まれるあらゆる物質的かつ客体的なもの、確固として不変なもの、外的で中立的なものを、その人物の自意識と自己告白の領野で溶解させてしまう」(詩学 111、傍点引用者)。

「拷問」とバフチンは言う。日常を無難に、安全に生き延びるために私は他者向けの「適切な」固い外皮をまとい、それを自分のアイデンティティとして設定し、自分の「内なる人間」を閉鎖してきたのである<sup>27</sup>。私が長く自己同一化してきたその適切な / 与えられた役割あるいは配役、その外皮はもはや私にとって「私」自身である。その外皮を破り、私がこの「自らの閉鎖性、完結性から解放され」(詩学 188) するために、私が長く萎縮させてきた私自身の「内なる人間」を引き摺り出そうとしてドストエフスキーは私を「拷問」にかける。それは「自己を開き自ら説明することを促すような」(詩学 132、傍点引用者)、つまり私を切開する環境に私を突き落とすことである。だとすれば「そのような環境においては、どの一つの要素をとってもニュートラルなものではあり得ない。そこではあらゆるものが主人公の肺腑をえぐり、彼を挑発し、問いつめ、さらには彼と議論したり愚弄したりするのでなくてはならない。すべての要素が、主人公自身に向かった働きかけとなり、すべてが不在の対象に関する言葉ではなく、そこにいる人間についての言葉、つまり《第三者》の言葉ではなく、《第二者》の言葉として感じられるのでなくてはならないのである」(詩学 132、傍点引用者)。

そのドストエフスキーの「拷問」をバフチンは別のジャンルにおいて、すなわち「カーニバル」と「ソクラテス」という記号から読み解いている。

カーニバルとは自己閉鎖することがもはや無理な、あるいはもはや無駄な状況である。

カーニバルとはフットライトもなければ役者と観客の区別もない見せ物である。カーニバルでは全員が主役であり、全員がカーニバルという劇の登場人物である。カーニバルは鑑賞するものでもないし、厳密に言って演ずるものでさえなく、**生きられる**ものである。カーニバルの法則が効力を持つ間、人々はそれに従って生きる、つまり**カーニバル的生**を生きるのである。カーニバル的生とは**通常**の軌道を逸脱した生であり、何らかの意味で《裏返しにされた生》《あべこべの世界》(monde à l'envers) である。

通常の、つまりカーニバル外の仕組みと秩序を規定している法や禁止や制限は、カーニバルのときには廃止される。何よりもまず取り払われるのは社会のヒエラルヒー構造と、それにまつわる恐怖・恭順・崇敬・作法などといった形式である。つまり社会のヒエラルヒーやその他の要因(年齢も含む)からくる不平等に基づくものすべてが取り払われるのである。人間同士の間のあらゆる**距離**も取り払われ、カーニバル特有のカテゴリーである、**自由で無遠慮な人間同士の接触**が力を得ることになる。

これはカーニバル的世界感覚の非常に重要な要素である。実生活では堅固なヒエラルヒーの障壁によって隔てられていた人々が、カーニバルの広場において自由で無遠慮な接触関係に入るのである。(詩学 248-249)

カーニバルの規範は「通常」の生の規範と対立する。通常のヒエラルヒー(階層・地位・年齢・財産)はすべて取り払われ、上位に位置すべきものが冒流的に格下げ(「卑俗化」)され、「神聖なもの」と冒流的なもの、高いものと低いもの、偉大なものと下らぬもの、賢いものと愚かなものが結び合わされ(「カーニバルにおけるちぐはぐな組み合わせ」)、あらゆる社会的距離を無視した無遠慮な接触が要求される。こうした「**常規の逸脱**こそカーニバル的世界感覚に特有なカテゴリー」(詩学 249、傍点引用者)であり、これこそカーニバル的世界の秩序である。

このカーニバルに投げ込まれたとき、それまでずっと通常の世界の秩序に適合して「正しく」生きてきた私は従うべき「正しさ」を失う。通常の世界はここでは全て転覆されている。その秩序に従うことはもはや「間違ったこと」、嗤いの対象でしかない。カーニバルの中では、反秩序こそ秩序であり、無秩序こそ秩序なのだ。通常の世界では「通常の世界に従う正しい(「高い」)私」はカーニバルでは「通常の世界に従うロバ(「低い」)」である。どうすれば「良い」か、何に従えば「正しい」のか、どうすれば世界の中で「無難に」生きていけるのか、もう私にはわからない。ただわかっているのは、私が私の生き延びのために選択してきた「適切なあり方」はこの「あべこべの世界」では完全に無意味だということだけである。

この地平とそこに置かれた人間を描くことこそドストエフスキーの問題であったとバフチンは言う<sup>28</sup>。ドストエフスキーの世界においては最も高潔な者が高潔であるが故に行う高潔な行為が殺人であり、売春婦が聖女であり、聖女が売春婦であり、白痴が賢者であり、賢者が白痴であり、さまざまな「ありえない」どんでん返しが起き、そのどんでん返しの中で初めて、公爵と召使い、殺人犯と彼を裁く判事が完全にフラットな、しかも誠実な、立場としての出会いではなく人間対人間の出会いの場に置かれる。「プロットが人物を例外的な状況に置き、彼の内面を開示し挑発して、異常で思いがけないシチュエーションの中で彼を他の人物たちと出せ、衝突させる。それはみな……《人間の内なる人間》を**試練にかける**ことを目的としているのである」(詩学 218)。

ドストエフスキーが仕組んだこれらの仕掛け＝カーニバル的状况の中で、「正しい私」は突き落とされ、通常の世界に適合してきた生は崩壊する。

二七 そしてこのカーニバル的状况の中で、存在の根底を揺さぶる呼びかけが起きるのである。

その呼びかけは「《人間の内なる人間》を**試練にかける**」もの、すなわちソクラテスがかつて行った呼びかけ、「ソクラテスの対話」である。

「ソクラテスの対話」とは、いうまでもなくソクラテスが「真理」を引き摺り出すために用いた手法である。

真理探求のための対話的方法は、自らが**出来合いの真実を所有している**と思っている**公的社会**のモノローグ主義とも対立するし、また自分たちが何ごとかを知っている、

つまり何がしかの真実を所有していると考える一般人たちの素朴な自信とも対立する。真理とは一人一人の人間の頭の中に生まれ、存在するものではなく、ともに真理を目指す人間同士が対話的に交流する過程において、人々の間に生まれてくるものなのだ。ソクラテスは自らを《仲介者》と呼んだ。彼が人々を寄せ集め、議論の中で衝突させると、その議論の中から真理が生まれてくるという意味である。この生まれてくる真実に対する関係から、彼は誕生を助ける者という意味で《産婆》と自称し、そして自分の方法を《産婆術》と呼んだのである。(詩学 226、傍点引用者)

真理は「存在するもの」ではなく「生まれてくる」ものであるとバフチンは言う。だとすれば、あらゆる「存在するもの」は真理ではない。真理とは「未だないもの」、「対話のなかで人々の間に生まれてくる」ものだからである。「存在している」ものは「真理ではない」。「存在している真理」は「真理」なのである。本当の真理を求めるためには、「存在する真理」をすべて「真理」としていったん廃棄しなければならない。ソクラテスの方法とはまさに否定の方法、「出来合いの真理」「人々が所有している真理」の廃棄の方法でもあるのだ。衝突と否定こそソクラテスという「産婆」の方法なのである。こうして「自分たちが何ごとかを知っている、つまり何がしかの真実を所有していると考える一般人たち」は、対話の場に「寄せ集め」られ、「衝突」させられ、その「何がしかの真実」を否定され、自分の「真理」が「真理」に転落していく場に置かれることになる。

バフチンによればこの「衝突と否定の方法」、すなわち《ソクラテスの対話》の二つの基本的な方法は、《シンクリシス》(σύνκρισις) と《アナクリシス》(ἀνάκρισις) であった。シンクリシスとは一つの対象に対する様々な見方を対比することを意味した。……アナクリシスとは対話の相手をけしかけてその言葉を導き出し、相手が意見を言わざるを得なくしてしまふ、しかも最後まで言いきらせてしまふ方法を意味した。ソクラテスはこうしたアナクリシスの一大名手であって、彼は人々に語らせることで、その無知なくせに頑固な先入観に言葉をまともせ、言葉の光でそれを照らし、そうすること自体によってその虚偽と不十分さを暴いてみせた。……アナクリシスとはつまり、言葉によって……言葉を挑発することに他ならない。シンクリシスとアナクリシスは思想を対話化し、外部におびき出して言葉の応酬と化し、思想を人々の間の対話的交流に参加させる」(詩学 227-228、傍点引用者) 方法なのである。

シンクリシスによってソクラテスは、「その真理」が「多様な見方の中の一つ」でしかないこと、すなわち唯一のものとしての真理ではないことを暴露し、アナクリシスによって「無知なくせに頑固な先入観」の「虚偽と不十分さ」を暴露する。意見が隠されているときにはそれが「不十分」なこと、「真理ではない」ことは隠れているが、隅々まで「外」におびき出され異論と衝突させられ隅々まで露に検討されてはじめて、その「真理」の瑕疵が露になる。同時に、その「瑕疵のある非真理」を唯一の「真理」だと思い込んでその「真理」に縛られていた主体は、それが「真理」であったことが暴露されてはじめてその「真理」から解放されるのである。

だとすればソクラテスが行った対話における「否定」は解放である。そしてこれは永続する解放なのである。なぜなら真理は「生まれてくる」ものだからである。対話の中で必然的に「存在する真理」は否定され、脱権力化され「続ける」。そのつど「真理」と見え

るものが生まれたとしてもその「生まれたもの」は絶えず「存在するもの」に転じ、「存在するもの」として「非真理」化する。この運動を保証するのが対話である。こうして私たちがこの世界を生きていく上で常に「何がしかの」地図、「何がしかの」真理を必要とし、それに依拠せざるを得ない者であるかぎり、私たちは存在論的に絶えず「出来合いの真理」に縛られざるを得ず、しかし同時に「真理」同士の衝突と否定の場としての「ソクラテスの対話」において、その「真理」から脱していく可能性を持ち「続ける」ことができるのである。

だとすれば私たちの選択肢は常に以下の二つである。「真理」を固持し私と私の「真理」をこの「存在するもの」の場所＝「非真理」の場所に繋留し続けるモノローグか、あるいは、あらゆる「存在する真理」＝死んだ真理を死なせ、真理へと共に流出していくダイアローグか。

こうしてバフチンは言う。「『ソクラテスの対話』が、その複雑な文学形式と哲学的深さにもかかわらず、カーニバルを基盤としていることに、疑問の余地はない。……一面的な真面目さ、あるいは明快さや一義性へのおぞましい情熱の中にとどまり、そこで固まってしまおうとする考えを許容することのない《議論》が、このジャンルのそもそもの核心にあったのである。……ソクラテスによる思想と真理の対話的本質の発見それ自体、対話に参加する人々同士のカーニバル的な無遠慮な関係と、相互間のあらゆる距離の撤廃を前提にしているものであり、さらには、いかにそれが高尚かつ重要なものであれ、思想の対象そのものへの、そして真理そのものへの無遠慮な関係を前提としているのである」（詩学265、傍点引用者）、と。

「おぞましい」「許容することのない」という強い言葉をバフチンは使う。「一面的な真面目さ、あるいは明快さや一義性」への情熱とはひたすら「存在する正しさ」への繋留の情熱、自己が「真理」を所有しようとする情熱であり、モノローグの専制への情熱である。それは、あらゆる私が生きる＝流出する主体であること、真理が生まれてくることを否定しようとする情熱である。

これに対し、この流出、すなわち無数の「真理」が互いに開示し合い互いに衝突する対話、「真理」の否定と対立を通して真理が生まれることを保証する対話こそ「ソクラテスの場」であり、したがって同時にあらゆる「真理」が転覆する「カーニバルの場」であるとするれば、シンクリシスとアナクリシス、つまり様々な「真理」の衝突・否定は、まさに異なる「真理」を所有している人々が集まり、それらの各々の「真理」を開示するそのつどのリアルな場に常に不可避的に生起する事態であるはずである。対話は生起するのだ。すべての私が私の「真理」を開示し、それらの「真理」を乱立させるとき、衝突と否定という流出＝対話は、生起するのだ。

二  
一五

## 5. カーニバルである対話

でも今しばし嘘はつきたくありません。僕の望みはそれだけです。だってそれは大事なことですからね。地上に暮らしては嘘をつかないなんて不可能です。人生と嘘は同義語なんですからね。でもここでは、おもしろ半分には嘘をつくなんてやめましょ

うや。畜生め、**墓場に**だって何がしかの意味はあるってもんですからね！ **みんな**で声を出して自分の身の上話を語り合い、**何も恥ずかしがらない**ことにしましょう。まず僕が先陣を切って自分のことを話すとしましょう。僕はですね、皆さん、肉食動物の生まれでしてね。**そうした本音の部分はみんな、あっちの上の世界じゃ腐った紐でゆわえて押し込められていたんです**。紐なんてくそくらえ、この二ヶ月は**破廉恥きわまりない真実**の中に生きていきましょうや！ **裸になりましょうや！ すっ裸にね！** (ドストエフスキー『ボボーク』より)

バフチンはドストエフスキーの別の作品から再び「嘘」についての台詞を引用する<sup>29</sup>。今度「嘘をつきたくない」と言うのは墓場に葬られている死者、クリネヴィチ男爵である。墓の下で死後「二ヶ月、三ヶ月、時には半年も」ほとんど腐りきりながら、死者たちは語り合う。「こうした設定によって、日常生活のありとあらゆる条件、地位、義務、法から解放された**意識の最終的な生** (完全な永眠までの二～三ヶ月の生)、いわば**生を越えた生**という常識では考えられない状況が作り出されることになる。そうした生を《同時代の死者たち》はどのように享受するであろうか？ この問いは、死者たちの意識に何ものにも制限されない**完全な自由**をもって自らの姿を曝け出すように挑発するアナクリシスである」(詩学 280)。

死んで初めて、もう「生きる」必要がない今となって初めて死者たちは「日常生活のありとあらゆる条件、地位、義務、法から解放され」「完全な自由をもって」「嘘」から解放される。そして高笑いを始めるのである。「棺の中の笑い (「……気持ちよさそうに**高笑いしながら**、将軍の**死体**が揺れ始めた)」」(詩学 280)。

この棺の中の「気持ちよさそうな」笑いを産むのは生からの解放である。

日本を代表する精神科医である中井久夫<sup>30</sup>は、現代日本の精神科患者の「発病に至る長い (あるいは短い) 経路の最初の方向性は、過度なまでに中心を指向している。このことが独特である。まず、中心を指向し、一元的・論理的・一本調子の生に足を踏み出す。そしてネジが噛み合わなかったり、降りられないところへ登ってしまったりして縁辺に転落し、混沌を経験する<sup>31</sup>」と言う。

おそらくこれは統合失調症の患者に限ったことではない。バフチンにおいて指摘されている通り、(《同時代の死者たち》)である私は日常の中で絶えず他者の世界に適合し、他者の価値・規範を内面化することを、そして他者の世界 = 「中心」に向けて自らを統合することを強く求められている。この「地上」の生を生き延びるかぎり、あらゆる私は常に自己を「他者」化し、「他者」の世界を生き延びてこなければならなかったのだ。こうして私は自ら「本当の声」を放棄し、自分が「あるがままの者」になる可能性を放棄してきたのである。生前のクリネヴィチ男爵、あるいはステパン・トロフィーモヴィチと同じ「嘘」を私は生きている。この「地上での生」においてあらゆる私は、健康な者であれ病む者であれ等しくこの亀裂を自らに刻んだ私なのである。

これに対し、オープンダイアログがバフチンとともに試行するのは、この「地上」にひとつの空間を切り開くこと、あるいはこのモノローグの「地上」そのものを転覆することである。彼らが行うのはシンプルなこと、**どんな声**にも場を与え、それを聴

くということに他ならない。それは「別の声」を排除してきた通常の世界の「秩序」を攪乱し、「禁止」を撤廃する。医師と患者、病者と健康なもの、専門家と素人、あらゆる立場と社会的役割の区別を取り払った「丸腰」の「車座」で、彼らは治療者である前にただ人間として目の前の人間に「自分の本当の」声を発し、目の前の人間の「本当の」声を聴こうとするのである。治療グループは対話の中で湧き上がってきた自分自身の自然な感情をその場に持ち込むことさえ取って行。「医師」ならありえない／だが「人間」なら当然の声をそのままここで挙げるのである。医師もまた自ら潜めてきたものを現すのだ。

こうして「適切 / 不適切」「正しい / 正しくない」の踏み絵が一切取り払われた場で OD は行われる。いや、むしろその踏み絵を取り払った、「他者」のものではない「人間」のための場を作ることこそが OD という治療である。そこでは誰もが「他者」でいなくてよいのだ。「おかしな」「まちがった」自分で良いのだ。そこは自分の声を取り戻す場なのだ。OD は相手の声を引き摺り出すために肺腑をえぐることも「拷問」にかけることもしない。ただ、まさに「適切さ」を要求するこの「地上」において、「正しさ」を要求する対話の中で病んできた患者に、対話を - 開くのである。

バフチンがドストエフスキーの『ボボーク』に見たように、それは「通常」の「地上」ではない場所、死者たちの墓場である。だが、「先陣を切って」「裸に！」と踏み絵を自ら越えていったクリネヴィチ男爵の姿を見て、棺の中の、棺を揺らすほどの気持ちの良さそうな笑いが生起する。

OD は患者に対話を - 開く。だがそれは対話を - 開くことである。病んだ対話、対話ではない対話、ただの「他者の」正しい言葉をなぞるものでしかないモノローグを、真に人間と人間との声の応酬に開くのである。

その中で癒えていくのは患者だけではあるまい。死者たち、すなわち「この地上の生」を終え、この地上の生から解放された生者たちが、この死と再生を祝うカーニバルの中で癒えていくのだ。だからこそ「カーニバルとは万物を破壊した再生させる時間に捧げられた祭りである」(詩学 251)<sup>32</sup>。カーニバルは日常が死に、日常が転覆されたことを祝うのだ。そして「私」が死に、「私」が転覆されたことを祝うのだ。なぜならそこにおいて、同一性の下で拒絶されてきた「別の声」「別の可能性」の再生が、あるいはそれが「別の声」ではなくまさに自分自身の声であり、他者たちに聴かれうる自分の声であることを取り戻した「あるがままの者」の誕生が開始されるからである。

私は「ひとたび死に(つまり否定され)、そして蘇る(つまり浄化され自分自身を越えていく)」(詩学 257)。

こうして、OD のなかで、カーニバルである対話のなかで、ひとつの「連帯」が生まれていく。それは死者たち = 新しい生者たちの、つまり植民地化された私を生きてきた者同士の、「本当の声」を抑圧してきた者同士の、「あるがままの者」であることを禁じられてきた者同士の連帯である。その私 - たちが、初めて自らの声を挙げ、聴こうとする連帯であり、「あるがままの者」になるという流出を共にする連帯である。

そしてこの「誰のものでもない広場」で、無限に続くポリフォニックな対話のなかで、私 - たちは私の同一性から共に出て行くのである。

※ミハイル・バフチンの著書からの引用は以下の略称で表し、続く数字は訳本の頁数を示すものである。ゴシック体はバフチンによる強調である（原文分ち書き）。

小説：伊東一郎訳『小説の言葉』平凡社、1996年

詩学：望月哲男、鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』筑摩書房、1995年

## 注

<sup>1</sup> 文科省が新学習指導要領の指導的概念として「対話的で深い学び」を導入しあらゆる学校に要請したこと、またそれに先立ち、国内の小・中・高等学校でアクティブラーニングの形で「対話」が取り入れられ「対話型授業」が模索されていることは周知の通りである。

<sup>2</sup> 日本でも2014年ごろから紹介され、2015年にはオープンダイアログの中心であるヤーコ・セイックラらが来日して彼らを囲むシンポジウムが開催され、また精神医療の領域のみならず現代思想や社会学の分野でも雑誌の特集が組まれるなど、急激にその存在感を強めている。

<sup>3</sup> ODはまだ新しい技法であり、世界的注目を集め始めているとはいえその全容の解明が進んでいるとはいえない。また、ODはあくまで精神医療の技法であり、ODの専門家は医師であって哲学者ではない。ODの中心的存在であるヤーコ・セイックラ自身も医療者であって、ODの思想的背景としてバフチンに言及しているとはいえ、バフチンの思想を詳らかに論じることは当然のことながらしていない。ODに集まっている関心も当然のことながらあくまで医学的なものであって、ODの「思想」を、しかもバフチンの思想の哲学的解明を通して詳らかに論じる研究は、管見によればほとんど存在していない。ちなみに、バフチンがODの思想的支柱であることは、セイックラ自身によって何度も言及されている（特にセイックラ、アーンキル、高木・岡田訳『オープンダイアログ』日本評論社、2016年、107頁-140頁参照）ほか、『オープンダイアログ』の訳者であり京都「たかぎクリニック」でACT（重症の精神障害者に対する包括型地域生活支援プログラム）を展開している高木俊介によって「本書は、バフチンの名前をいちいち押し出さずとも、あらゆる記述がバフチンのダイアログの思想をふまえています」（高木俊介、「訳者あとがき」『オープンダイアログ』219頁）と指摘されている。

<sup>4</sup> 齋藤環「オープンダイアログは精神科医療に何をもたらすか」、『精神看護』2015年9月号、医学書院、474頁。

<sup>5</sup> 同上。治療成績について齋藤は、「この治療法を導入した結果、西ラップランド地方において、統合失調症の入院治療期間は平均19日間短縮されました。薬物を含む通常の治療を受けた統合失調症患者群との比較において、この治療では、服薬を必要とした患者は全体の35%、2年間の予後調査で82%は症状の再発がないか、ごく軽微なものにとどまり（対照群では50%）、障害者手帳を受給していたのは23%（対照群では50%）、再発率は24%（対照群では57%）に抑えられていた」という。これは医師にとっては「魔法のような治療」であると齋藤は述べている。（齋藤環『オープンダイアログとは何か』医学書院、2015年、11頁）。

<sup>6</sup> ODの原則(1)即時に応じること。なお、即時的治療の有効性は、OD以外の通常の精神治療においても指摘されている。「失調の四十八時間以内に治療を開始した人はきれいに治るといってよいといえると思います」（中井久夫「統合失調症についての自問自答」、『精神科医がものを書くとき』筑摩書房、2009年、142頁）。

<sup>7</sup> ODの原則(2)ソーシャル・ネットワークを引き入れること。

<sup>8</sup> ヤーコ・セイックラ、メアリー・E・オルソン、齋藤環訳「精神病急性期へのオープンダイアログによるアプローチ——その詩学とマイクロポリティクス」、『オープンダイアログとは何か』90頁。引用文括弧内は引用者による注である。



<sup>9</sup> ODの原則(6) 不確かさに耐えること。

<sup>10</sup> ODの原則(3) 個別で具体的な様々なニーズに柔軟に対応すること。

<sup>11</sup> ODの原則(4) 責任をもって対応すること。「最初のミーティングに集まってきたチームは、目下の事態を分析し、今後の治療計画を立てるための全責任を負っている。どうしたらよいかをちゃんと知っていて頼りになる人がどこかにいるわけではない」(セックラ、アーンキル『オープンダイアログ』、63頁)。また、これはODの原則(5) 心理的な連続性を保証することともつながる。メンバーがころころ替わるのではなく、この(4)の責任の下で最後まで場を支えるということである。

<sup>12</sup> ODの原則(7) 対話主義。

<sup>13</sup> 「ミーティングでは、全員がひとつの部屋で車座になって座り、その場で自由に意見を交換することができます」セックラ、オルソン「精神病急性期へのオープンダイアログによるアプローチ——その詩学とマイクロポリティクス」、『オープンダイアログとは何か』89頁。

<sup>14</sup> 柳澤田実、「ポストモダンな幸せ?」、『精神医療の新時代』(『現代思想』2016年、9月号)所収、120頁。

<sup>15</sup> セックラ、オルソン「精神病急性期へのオープンダイアログによるアプローチ——その詩学とマイクロポリティクス」、『オープンダイアログとは何か』96頁。

<sup>16</sup> 同上。

<sup>17</sup> 「オープンダイアログは、患者の精神病的発話、詩的で内的な声、幻覚的徴候の内にとどまったままになっている経験を、共通の話し言葉へと育てることで治療を行おうとするものである。(対話)についてのバフチン学派的な考えと、それを精神病治療に適用する時の基礎にあるものは、言語とコミュニケーションがまさに社会的現実を構成していると言う考え方である。危機は新たな物語を生み出す「チャンス」である」(セックラ、アーンキル『オープンダイアログ』、142-143頁)。また、「チームはどのような発言も許されて大事にされ、可能になり、また精神病的な言動で自分自身を表現することでさえも、会話における表現手段の一部となるような雰囲気や態度をつくりだす」(同上、144頁)。

<sup>18</sup> セックラによればオープンダイアログには2つの重要な支えがある。「詩学(poetics)」と「マイクロポリティクス(micropolitics)」である。マイクロポリティクスとは、この手法を支えている制度的な側面のことで、フィンランド政府が実施しているニーズ適合型アプローチの一部をなすものである。個々の具体的な事例やニーズに適合したきめ細かい治療を提供するという政策のもと、オープンダイアログはフィンランド政府の公的医療サービスに組み込まれており、いわゆる「私費治療」ではなく、無料で治療が可能な保険適用内の治療となっている。これがオープンダイアログの安定的運用を支えている。

<sup>19</sup> また加えてバフチンは次のようにも言う。「言語・イデオロギー的生活のいかなる歴史的局面においても、あらゆる社会階層のあらゆる世代が自己の言語を持っている。それだけではない、同年輩の者たちはすべて、それぞれ本質的にその言語、その語彙、その特殊なアクセントの体系を持っており、それらはまた、社会階層、教育施設(幼年学校、ジムナジウム、実科中学校等の生徒たちはそれぞれ異なる言語を持っている)その他の、分化を促す諸要因に応じて変化する」(小説62)。

<sup>20</sup> バフチンはこう言う。「まだ語られていない無垢な世界に近づいた神話のアダム、孤独なアダムだけが、対象におけるこの他者の言葉との対話的な相互定位を実際に最後まで免れることのできた唯一の人間であった」(小説44、傍点引用者)。

<sup>21</sup> 「言葉による自己の対象の概念的理解は、対話的な行為なのである」(小説45)とバフチンは言う。自己が裸眼で対象を見ることがはもはやありえず、自己は他者の眼を通して対象を眼差し、他者の言葉を通して対象を認識するのである。対象の理解において既に常に自己は他者と出会い他者に規定されている。

<sup>22</sup> さらにバフチンは次のように言う。「現実の他者の声は全て不可避免的に、主人公の耳の中で既に響

き渡っている他者の声と融合してしまうのである。そして〈他者〉の現実の言葉もまた、あらゆる先取りされた他者の応答と同様に、永久運動に巻き込まれてしまうのだ」(詩学 531)、と。

<sup>23</sup> バフチンは言う。「主人公の自意識はそこでは内部から突き破ることの不可能な作者の意識という鞘、彼を規定し描写する作者の意識の鞘に収められ、そのうえで外部世界の確固たる基盤の上に置かれているのである」(詩学 107)。

<sup>24</sup> バフチンによる引用 (詩学 197-198)。

<sup>25</sup> (詩学 107) 参照。

<sup>26</sup> この句は日本人にとってはあまりにも「当たり前」で「すでに」「受け入れられる」もの、すでに「権利」を持つものになっているかもしれない。だが、例えば「一日をふろふきにして 熱く香ばしく食べたいんだ」や「カラッと揚げるのが コトバは肝心なんだ」(いずれも長田弘『食卓一期一会』晶文社、1979年)はどうだろう。「言葉を唐揚げにする」「一日をふろふき(大根)にする」などは、「おかしな」発話である。しかし、このコンテクストを破壊する用語こそが詩の言葉である。通常の会話では受け入れられない「ナンセンス」な発話が詩の特徴である。

<sup>27</sup> 「外皮とは他者のためにあるもの、(他者の目から見た)人間の外面的評価を定める役割をするものであり、したがって純粋な自意識を曇らせてしまうものだからである」(詩学 244)。

<sup>28</sup> バフチンは、これこそドストエフスキーが明確な目的の下で行った「文学のカーニバル化」(詩学 248)であるとす。

<sup>29</sup> バフチンによる引用 (詩学 282)。

<sup>30</sup> 笠原嘉、木村敏、安永浩らと共に、日本の精神病理学第二世代を代表する精神科医。統合失調症を専門とする。

<sup>31</sup> 中井久夫『治療文化論-精神医学的再構築の試み』、岩波書店、2001年、194頁。

<sup>32</sup> カーニバルの核心をなすのは「交替と変化」であり「死と再生」である。このカーニバルにおいて、「自らの閉鎖性、完結性から解放され、そっくり対話化されて」(詩学 188)、われわれ一人一人の内では「ひとたび死に(つまり否定され)、そして蘇る(つまり浄化され自分自身を越えていく)のである」(詩学 257)。

※本論文は、JSPS 科研費 [課題番号 26370006] の助成を受けたものである。

## Bakhtin's dialogue / Poetics as a dialogue —— The background of Open Dialogue ——

Sachiko IGARASHI

This paper aims to clarify the dialogue of the Open Dialogue and the poetics of Bakhtin as its ideological background. He says that we are occupied by words of other in double sense. One is that we cannot recognize the object without words of other, another is that we cannot talk without expecting listener's response. Bakhtin compares such way of being to novel, and demands poetics as non-sense which denies single plot and righteousness. Dostoevsky=Bakhtin opens up the poetic space / space of dialogue that allows countless voices to arise together. Bakhtin finds a carnival as to overturn the order and Socratic dialogue in this space. In the Open Dialogue / dialogue as a carnival, we celebrate death and rebirth, and will heal.